

幼児の原体験と両親の子どもの遊びに対する 養育態度との関連性

亀山 秀郎*, 嶋崎 博嗣**

(平成22年6月18日受付, 平成22年12月3日受理)

Relation between Children's "Protoexperience" and Their Parents' Attitudes toward Child-Rearing concerning Children's Play

KAMEYAMA Hideo *, SHIMAZAKI Hiroto**

The purpose of this study was to examine a causal relationship between children's "protoexperience" and their parents' attitudes toward child-rearing concerning children's play. Parents of 484 3- to 5-year old children participated in this study. The participants answered to a survey on "protoexperience" of preschool children and what prevents their children to have "protoexperience". Parents' attitudes consisted of four factors: suppressive style, directive style, supportive style, acceptive style. As a result of analysis of variance among two groups of parents according to the amount of their children's "protoexperience", the mothers of high profile children showed significantly low scores on directive style and high scores on supportive style, while the fathers of high profile children showed significantly low scores on directive style.

Key words : preschool children, "protoexperience", Parents' Attitudes toward Child-Rearing concerning Children's Play

I 目的

幼児と自然との関わりについて様々な報告や、提言がなされている。例えば、文部科学省の「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方に関する調査研究協力者会議報告」(1997)⁽¹⁾において、幼児の遊び内容も変化し、屋外遊びから屋内に、また一人遊びが増大していることを指摘している。このことから、幼稚園内外での自然体験の重要性が求められている。この実態を受け、日本学術会議(2007)⁽²⁾は、「身近な自然体験の場としての校庭・園庭の整備」、「自然遊びの方法の学習と継承」といったハードとソフト面の行動戦略を挙げると共に、「幼児教育・学校教育における地域と連動した体験活動の実施」といった内容、幼稚園を中心とした自然体験活動のできるコミュニティ作りを具体的な行動戦略として挙げている。さらに平成21年に施行された幼稚園教育要領の内容の取り扱いにおいても、これまでの自然体験活動に加えて、体験により幼児の思考の芽生えを育むことができるよう求めている⁽³⁾。

これまでの知見により、自然体験の重要性は数多く指摘されているが、幼児の心身の発達に貢献する自然体験として、山田(1993)⁽⁴⁾は「原体験」を提唱している。この原体験は、教育心理学で用いている(Original experience)と区別するために、“原”を「原始的な」と

いう“proto”という意味で捉え、“protoexperience”として、「生物やそのほかの自然物、あるいはそれらによって醸成される自然現象を触覚・嗅覚・味覚の基本感覚を伴う視覚・聴覚の五官(感)で知覚したもので、その他の事物・事象の認識に影響を及ぼす体験」と定義している⁽⁵⁾。この原体験は、触・嗅・味の基本感覚を少なくとも1つでも含む体験であり、継続的に体験しないと忘れてしまう視・聴覚と違い、1度でも体験すれば一生残る長期記憶になるものである。この原体験について、体験活動と指導のあり方に関する調査研究委員会(2004)⁽⁶⁾では、原体験の第一義的な役割として、多様な五感刺激がヒトの大脳皮質のシナプス形成やネットワーク化に寄与することや、それらが著しく促進され全体の90%が完成する「乳幼児期から小学校低学年」が最適であることを報告している。また、小林(2000)⁽⁷⁾は自然物や自然現象と触れる原体験を通して、好奇心、感性、探究する意欲などに関与する大脳新皮質の鍛錬、育成につながる教育的意義を述べている。このことから、原体験ができる保育を展開することが、幼児にとって有意義であることが伺える。

これまでの幼児の原体験に関わる先行研究の視点は、二点挙げられる。第一点目として幼児の原体験の実態⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾、世代間比較に関するものである⁽¹¹⁾。その中で現在

* 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生 (Doctor program student of the Joint Graduate school in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

** 東洋大学 (Toyo University)

表1 子どもの遊びに対する養育態度の質問項目

下位 尺度名	質問項目
抑制的 態度	子どもが友達に乱暴なことをしたら、厳しく注意する 子どもが危ない遊びをしたら、厳しく注意している 子どもが一人で遠くへ行かないようにしている やってよい遊び、悪い遊びの区別を教えるようにしている
教示・ 指導的 態度	子どもが誰かと遊ぶかは、親が指導している 子どもが友達と遊ぶよりは、知的活動をするように励ましている 子どもが遊びの中で、うまくできないことがあるとすぐに手助けするようにしている
支持的 態度	子どもが一人で遊ぶより、他の友達と遊ぶように気をつけている 子どもを作ったものや、書いたものは、なるべくほめるようにしている 子どもをつれて、近くの公園などで、よく遊ぶようにしている
受容的 態度	子どもがけんかしても、あまり注意しないようにしている 子どもが一人で遊んでいる時は、なるべくほうっておくようにしている

の幼児は、その両親が幼少児期に体験した原体験より有意に減少していることを報告しており、幼稚園・保育所における環境や保育カリキュラムの中に意図的に盛り込むことの必要性を述べている。第二点目として、幼児の原体験を巡る日常の背景要因について着目した先行研究があり、日常の遊び状況、両親の意識との関連を検討したものがあ(12)(13)。これらの報告から、幼児が豊富な原体験をするためには、「時間」、「空間」、「仲間」が十分に整えられた遊び場が必要であると述べられている。そして、両親が身の回りの原体験できる場について知ることや、親自身の体験を豊かにする必要性が述べられている。

しかし、幼児の原体験の減少だけでなく、「時間」、「空間」、「仲間」も減少しており(14)、1955年と1975年を比べると、原体験が可能な自然スペースについては、都市化により約1/80の減少を報告している(15)。さらに、ベネッセの調査によると、少子化や核家族化により幼児と母親と一緒に遊ぶ割合が、きょうだい、友達や、親戚を抜いて増加していることや(16)、母親、父親の子育てで力を入れている内容が、「屋外で遊ぶこと」と共に、「自然とたくさんふれあうこと」について2005年に比べ、2009年の方が増加している(17)。この現状において、遊びの中でできる幼児の原体験には、一緒にいる両親の養育態度が大きく関連することが推察される。

このような両親の遊びにおける養育態度の指標として、この荻原(1990)(18)が作成した「子ども遊びに対する養育態度」がある。この「子どもの遊びに対する養育態度」の下位尺度は、子どもの行動を厳しく注意したり、禁止したり、制限する「抑制的態度」、子どもを励まし、手助けし、指導する「教示・指導的態度」、子どもを誉めたりしながら遊びに積極的に関わる「支持的態度」、子どもを注意したりせず、遊びにも直接かかわらず、基本的に見守る「受容的態度」から構成されている(表1)。この子どもの遊びに対する養育態度を用いた

先行研究として、荻原(1990)(19)は教示・指導的態度をとる母親ほど、幼児の近所遊び量に対して負の影響を与えることを報告している。また、奥田(1997)(20)の報告では、子どもの遊びに対して教示・指導的な態度をとる親の子どもよりも、受容的な態度をとる親の子どもの方が、自律性が高い傾向を報告している。これらの先行研究から、両親の遊びに対する養育態度次第で、幼児の健全な発達を促す遊びや、幼児自身の自律性まで左右することが伺える。

「仲間」、「時間」、「空間」を確保して原体験を伴った遊びを展開することは、幼稚園・保育所の保育カリキュラムの編成によって可能だと考えられる。しかし、降園後の幼児の原体験を左右するのは、「仲間」、「時間」、「空間」が確保された場だけでなく、両親の意識や、遊びに対する養育態度であることが想定される。しかし、現在までの先行研究において、幼児の多様な遊びに内包された原体験と、遊びに対する養育態度との関連性を焦点化した研究は皆無である。今後、幼児の原体験が先細りする中で、幼児の遊びによる健全な成長発達を促進するためには、幼児の原体験と両親の遊びに対する養育態度との関連について検討する必要がある。そこで本研究では、幼児の原体験と、両親の遊びに対する養育態度と関連性があるかを検討するものである。そして、豊富な幼児の原体験と関連する養育態度の下位尺度概念から、保育現場から両親に対するアプローチの方法を模索するものである。

II 方法

1 調査内容

① 幼児の原体験

幼児の原体験を把握するために、山田(1990)(21)の「原体験」の類型(「火」、「石」、「土」、「水」、「草」、「木」、「動物」、「ゼロ(註1)」)を用いた。なお、項目抽出に際して、幼児の健康教育に携わる者3名が、それぞれ幼少期

に印象に残っている各種体験を報告し、一致度の高さや幼児に体験させたい内容を考慮に入れて、26項目抽出した(表2)。さらに、回答結果の分布の偏りを想定して4件法(「まったくない」1点、「あまりない」2点、「すこしある」3点、「よくある」4点)で質問紙を構成し、幼児の日常の様子をよく知る母親に対して、幼児の原体験について評価し、回答を求めた。

②両親の遊びに対する養育態度

両親の遊びに対する養育態度については、荻原(1990)⁽²²⁾が作成した「子どもの遊びに対する養育態度」の12項目を使用した(表1)。各質問項目について5件法(「いつもそうする」1点、「たいていそうする」2点、「どちらともいえない」3点、「あまりそうしない」4点、「そうはしない」5点)で、母親、父親それぞれに問うた。

2 調査方法

機縁法により、兵庫県私立幼稚園2園の両親に対して、質問紙調査を実施した。質問紙は無記名で、母親、父親共に記入するように求め、担任により配布、回収を行った。

3 調査対象

対象者は、中核都市にある私立A幼稚園と、大都市近郊のニュータウン内にあるB幼稚園に在園する年少、年中、年長児の計716名の両親であった。配布数716部、質問紙の回答に不備が見られず、両親共に記入された有効回答は484部(年少児80名、年中児184名、年長児220名・有効回答率67.6%)であった(表3)。なお、平均年齢は、母親34.2歳(SD=4.14)、父親36.2歳(SD=5.06)であった。また、3名の性別不明の回答があったが少数であるため、本分析における有効回答とした。

4 調査期間

調査用紙の配布日は2004年6月30日であり、回収日は2004年7月6日であった。

5 分析方法

分析を進めるにあたり、子どもの遊びに対する養育態度下位尺度について、幼児の各学年間の差異を検討した。その結果、いずれの下位尺度においても有意差が認められなかったため、データを一括して処理することと

表2 原体験質問項目

火 体 験	マッチで火をつけたことがある
	たき火をしたことがある
	火の暖かさを感じたことがある
石 体 験	石を投げて遊んだことがある
	いろいろな色や形の石を集めたことがある
	地面に石で文字や絵を書いたことがある
土 体 験	素足で土の上を歩いたことがある
	土のぬくもりや冷たさを感じたことがある
	泥遊びをしたことがある
水 体 験	雨に濡れながら遊んだことがある
	湧き水を飲んだことがある
	水かけ遊びをしたことがある
草 体 験	草花で遊んだことがある
	草のにおいをかいだことがある
	草で手を切ったことがある
木 体 験	木の葉や木の実を集めたことがある
	木の実をとって食べたことがある
	木をおもちゃにしたことがある
体 動 験 物	虫とりをしたことがある
	虫の飼育をしたことがある
	虫の声に耳をすましたことがある
ゼ ロ 体 験	おなかが減ったのを我慢したことがある
	日の出を見たことがある
	真っ暗闇を歩いたことがある
	鳥肌を立てて、寒さに震えたことがある
	ひたいから汗がダラダラと流れたことがある

した。

幼児の原体験と子どもの遊びに対する養育態度のCronbach信頼性係数 α を求めたところ、幼児の原体験の尺度全体では0.91であった。また、子どもの遊びに対する養育態度の尺度全体では0.52であり、下位尺度ごとに見ると、抑制的態度0.69、教示・指導的態度0.63、支持的態度0.40、受容的態度0.29であった。このため本調査において、子どもの遊びに対する養育態度の信頼性係数が十分な値を示さなかったため、カテゴリカルデータとして分析を行った。

幼児の原体験と両親の遊びに対する養育態度との相互関連性は、スピアマンの順位相関係数を算出した。さらに両親の遊びに対する養育態度からみた幼児の原体験の差異を明らかにするため、両親の遊びに対する養育態度の下位尺度ごとの合計得点を操作的に約25%レンジで4層に分類した。そして、下位25%と上位25%を用いてマン・ホイットニーのU検定により分析を行った。分析ソフトは、SPSS 17.0J for Windowsを用いた。

表3 調査対象者の内訳

	年少児(3歳児)		年中児(4歳児)		年長児(5歳児)		性別不明	合計	
	男児	女児	男児	女児	男児	女児		男児	女児
A幼稚園	21	18	39	44	37	51	1	97	113
B幼稚園	23	17	41	58	59	73	2	123	148
合計	44	35	80	102	96	124	3	220	261

Ⅲ 結果

幼児の原体験と子どもの遊びに対する養育態度を下位尺度別に相関分析を行った結果は、表4に示すとおりである。結果を概観すると、母親については、子どもの遊びに対して教示的・指導的態度の低さが、幼児の原体験の高さと1%水準で有意に関連しており、支持的態度の高さが、幼児の原体験の高さと5%水準で有意に関連している。一方、父親については、子どもの遊びに対して教示的・指導的態度の低さが、幼児の原体験の高さと5%水準で有意に関連していることが明らかとなった。

さらにマン・ホイットニーのU検定を行った結果は、表5に示すとおりである。母親については、遊びに対する教示・指導的態度と、支持的態度において低群と高群との間に差異が認められた。そして、教示・指導的態度低群の幼児は、原体験が高く、支持的態度高群の幼児は、原体験が高い結果となった。一方で父親については、遊びに対する教示・指導的態度において低群と高群との間に差異が認められた。そして、教示・指導的態度低群の幼児は、原体験が高い結果となった。

表4 幼児の原体験と子どもの遊びに対する養育態度との相互関連性

	下位尺度	幼児の原体験	危険率
母親	抑制的態度	-0.030	n. s.
	教示・指導的態度	-0.205	**
	支持的態度	0.108	*
	受容的態度	0.050	n. s.
父親	抑制的態度	-0.008	n. s.
	教示・指導的態度	-0.108	*
	支持的態度	0.052	n. s.
	受容的態度	0.029	n. s.

*:p<0.05 **:p<0.01

Ⅳ 考察

幼児の原体験と両親の遊びに対する抑制的態度と受容的態度との関連が認められなかった点については、幼児の原体験を伴った遊びを行う際、態度に関する項目については、安全や善悪の判断を両親が行うという最低限の配慮としてなされていることが想定される。

また、幼児の原体験と教示・指導的態度と関連が認められたことについては、両親が幼児の遊びに対して過保護、過干渉になり過ぎ、幼児の原体験を阻害していることが考えられる。両親の過度な安全意識や衛生志向が、両親の子どもの遊びに対する養育態度にダイレクトに関わり幼児の原体験を規定することが推察される。さらに、幼児が両親の過度な安全意識や衛生志向に関する情報や知識を繰り返し提供されることで、親子間で拒否感や不快感といった「情動スクリプト^(註2)」の連鎖を引き起こし、子どもの原体験量を左右することが考えられる。幼児が原体験をしようとしている時には、多少のリスクを伴う活動や、汚れる活動について、両親が見守るような姿勢がとれるように、保育者や他の両親との相互の関わりによって伝えていく必要性があると考えられる。

幼児の原体験と母親の遊びに対する支持的養育態度に関連が認められたことについては、母親が日常の遊びにおいて外遊びを禁止せず、積極的に原体験ができる「時間」、「空間」、「仲間」のそろう場所に幼児を連れ出し、その遊びを伴ってできる原体験を認める養育態度をとっていることが考えられる。一方で、幼児の原体験と父親の遊びに対する支持的養育態度に関連がみられなかったことについて、ADKこども生活力調査レポート(2006)⁽²³⁾によると、父親と子どもが一緒に過ごす時間が一時間以内である場合が、平日、休日共に約半数以上となっている。このことから母親と違い父親は就労状況から日常的に幼児と関わる時間がとれず、母親のように「時間」、「空間」、「仲間」のそろう場に行ける状態でないことが想定される。

本調査の結果から、幼児の原体験が、両親の遊びに対する養育態度に関連する1要因であることが分かった。

表5 幼児の原体験と子どもの遊びに対する養育態度との差異

		母親				父親					
		中央値	順位総和	U値	危険率	中央値	順位総和	U値	危険率		
抑制的態度	高群	n=126	55.5	16358.0	8357.0	n. s.	n=152	56.5	17097.5	5469.5	n. s.
	低群	n=138	56.5	18622.0			n=79	57.1	9698.5		
教示・指導的態度	高群	n=147	54.0	17480.5	6602.5	**	n=132	54.0	16092.5	7314.5	**
	低群	n=125	59.0	19647.5			n=137	57.1	20222.5		
支持的態度	高群	n=159	59.0	25801.5	9496.5	*	n=83	57.1	10221.0	5632.0	n. s.
	低群	n=142	55.0	19649.5			n=149	55.0	16807.0		
受容的態度	高群	n=184	57.1	30341.0	11519.0	n. s.	n=160	57.0	24684.0	11076.0	n. s.
	低群	n=135	55.0	20699.0			n=143	57.1	21372.0		

*:p<0.05 **:p<0.01

このことから、現在の幼児に対して豊富な原体験ができるようにする実践には、両親の遊びに対する養育態度を変えるきっかけ作りが重要な視点であり、将来多様な原体験を後世に伝えていくための重要な手立てだと考えられる。

このような実践として、久保ら（2000）⁽²⁴⁾の幼稚園と家庭とが連携した実践がある。この実践では、母親同伴による園外保育を実施し、散策中の幼児の体験に母親自身が改めて気づきを与えることを報告している。また、別の取り組みとして、亀山（2008）⁽²⁵⁾の幼稚園主催の里山公園における母親とその幼児を対象としたデイキャンプの取り組みが挙げられる。この取り組みでは、非日常のキャンプ活動ではあるが、1日のキャンププログラムをきっかけにして、母親との原体験の共有を幼児はできるのではなかろうか。また、普段幼稚園に来ることができない父親に対しても、父親参観日や父親の子育て力を生かす「オヤジの会」などの行事をきっかけに、父親が幼児と共に原体験ができる機会を提供することが可能である。例えば、幼児が父親と共に火を起しパンを焼く活動や、竹を使っての器やコップを製作する活動を幼稚園で幼児と父親が実践したものである⁽²⁶⁾。このような活動を展開することにより、幼児と関わる時間の少ない父親が、幼児の原体験を促進させる関わり方に気づく契機を与えられると考えられる。

最後に幼稚園ができる両親への働きかけとして、両親の生活圏の中で原体験ができる場の情報提供が挙げられる。両親が生活圏内で見落とししている、原体験できる場の紹介をはじめ、身近な親子サークル活動、子ども会活動、NPO法人主催の野外活動さらに、住民と行政の参画で運営されている冒険遊び場（プレーパーク）といった原体験をすることができる活動について、幼稚園が情報発信を行い、両親自身が積極的にそのような場所に行けるようにすることが、幼児の原体験の拡大に繋がると考えられる。

V 今後の課題と研究視点

本研究では、機縁法による2つの幼稚園での調査から幼児の原体験と子どもの遊びに対する養育態度の関連性をみた。今後の課題として、サンプル抽出の際、機縁法ではなく無作為抽出法による、より多くの幼稚園での調査が望まれる。

今後の研究視点としては、調査を行った園において養育態度の変容を促す原体験プログラムを両親に対して実施して原体験の変容を明らかにする必要がある。そして、その結果について、保育者から両親に情報を提供することで、原体験による幼児の新たな可能性や、原体験を伴った遊びに対する能動性を再認識できるようにする必要がある。また、原体験プログラムを通した両親の

対人イメージ（幼児・両親間）がどのように変化するかを明らかにする必要がある。そして幼児だけではなく、親同士のネットワークの拡大を促し、幼児の原体験にも回帰していく好循環の生成が期待される。

—注—

- (1)山田卓三は、「火」、「石」、「土」、「水」、「草」、「木」、「動物」のいずれにも含まれない体験や、情感体験を「ゼロ体験」と定義している。
- (2)情動スクリプトについて遠藤（2002）⁽²⁷⁾は、「遭遇した出来事、それに対する認知的評価、生じた情動、養育者の対応、あるいは、そこで取られた対処方略などが一定の連鎖をなして認知的構成体として子どもに取り込まれること」と述べている。

—文献—

- (1)文部科学省『時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方に関する調査研究協力者会議報告—最終報告—』参照
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/004/toushin/971101.htm
(最終アクセス2010年5月26日)
- (2)子どもを元気にする環境づくり戦略・政策検討委員会『我が国の子どもを元気にする環境づくりのための国家的戦略の確立に向けて』日本学術会議, pp.11-18, 2007
- (3)文部科学省『幼稚園教育要領』p.17, 2009
- (4)山田卓三『生物学からみた子育て』裳華房, pp.121-127, 1993
- (5)東京学芸大学野外教育実習施設『環境教育辞典』東京堂出版, pp.75-78, 1992
- (6)体験活動と指導のあり方に関する調査研究委員会『「少年期に必要な体験活動と指導のあり方」—少年・少女が一人前になるための体験活動—』国立信州高遠少年自然の家, pp.44-101, 2004
- (7)小林辰至「原体験を基盤とした科学的問題解決学習のモデル化に関する研究」『兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 博士論文』, pp.16-17, 2000
- (8)赤木敏之「乳幼児における原体験に関する研究(I)」『聖和大学論集』19, pp.143-156, 1991
- (9)岡村はた・赤木敏之「乳幼児の野外あそび調査研究—基礎調査結果とその考察,論議—」『聖和大学論集』20, pp.155-188, 1992
- (10)亀山秀郎・嶋崎博嗣・渡部努・石井正邦「幼児の原体験に関する研究」『幼年児童教育研究』16, pp.45-53, 2004
- (11)亀山秀郎・嶋崎博嗣・北尾岳夫「幼児と両親の原体

- 験に関する世代間比較研究－兵庫県私立K幼稚園・N幼稚園の調査から－』『幼年児童教育研究』17, pp.23-31, 2005
- (12) 亀山秀郎・嶋崎博嗣・北尾岳夫「幼児の原体験保有からみた平日・休日の遊び状況」『幼年児童教育研究』18, pp.1-10, 2006
- (13) 亀山秀郎「幼児の原体験と両親が抱く子どもの原体験阻害意識との関連性」『乳幼児教育学研究』18, pp.111-120, 2009
- (14) 仙田満『子どもとあそび－環境建築家の眼－』岩波新書, pp.157-175, 1992
- (15) 仙田満『こどもの遊び環境』鹿島出版会, pp.141-154, 2009
- (16) ベネッセ教育研究開発センター『第3回幼児の生活アンケート報告書』ベネッセコーポレーション, p.59, 2006
- (17) ベネッセ次世代育成研究所『第4回幼児の生活アンケート 速報版』ベネッセコーポレーション, p.11, 2010
- (18) 萩原元昭『幼児の近所遊びに関する基礎調査』多賀出版, pp.127-156, 1990
- (19) 前掲書 (18) pp.198-207
- (20) 奥田援史「養育態度のタイプと幼児の自律性」『滋賀大学教育学部紀要教育科学』(46), pp.1-7, 1997
- (21) 山田卓三『ふるさと感じる遊び事典』農文協, p.344, 1990
- (22) 前掲書 (18) pp.127-156
- (23) 矢島正司・稲葉光亮「ADKこども生活力調査レポート vol1」『株式会社 アサツーディ・ケイ』, pp.1-5, 2006
- (24) 久保由美子・高橋敏之・中谷 恵子「園内環境の見直しと家庭との連携を通した幼児と植物とのかかわり-自然に感動し命を大切に作る心を育む保育」『家庭教育研究-』(5), pp.47-56, 2000
- (25) 亀山秀郎「幼児と母親を対象としたデイキャンプの実践と評価 -両親が抱く子どもの原体験阻害意識尺度と自由記述を用いた事後アンケートを手がかりに-」『幼年児童教育研究』20, pp.65-71, 2008
- (26) 川口順子「自然体験と父親の子育て力」井上美智子・無藤隆・神田浩行編著『むすんでみよう子どもと自然』北大路書房, pp.134-144, 2010
- (27) 遠藤利彦「情動と体験の内化」須田治・別府哲編著『社会・情動発達とその支援』ミネルヴァ書房 pp.29-44, 2002

－付記－

本研究は、日本幼少児健康教育学会第24回大会【秋季大阪大会】において発表したものを加筆修正したもので

ある。

－謝辞－

本論文執筆にあたり、ご指導・ご助言頂きました兵庫教育大学の名須川知子先生に深く感謝申し上げます。